

MUSEUM

ミュージアム・アイズ

EYES

Mm
MEIJI UNIVERSITY
MUSEUM

Vol. 71
2018

特別展

特集 ウィリアム・ガウランドと 日本の古墳研究

Contents

- 博物館活動報告… 博物館来場者数が100万人を突破しました
企画展「明大考古学の過去・現在・未来—モノ学のその先へ…—」
を開催しました
- 展示&リサーチ… 中国革命宣伝画 プロパガンダ芸術の頂点
- 市民レクチャー… 関東近世城郭における瓦研究の現状
- 学芸研究室から… 黒曜石原産地における先史狩猟採集民の行動系(2)
- 収蔵室から… 弩機—古代中国最強の武器
浮世絵と錦絵 ~当館所蔵の錦絵から~
- 南山大学協定通信 / 図書室から / 博物館入館者数の動き /
団体見学の記録 / M2カタログ / 博物館友の会から

特集

明治大学博物館2018年度特別展 ウィリアム・ガウランドと 日本の古墳研究

古墳の調査と研究の「原点」- 関連資料が大英博物館から130年ぶりの里帰り -


10月13日(土)~12月2日(日) 会期中無休

入場料：¥300(明治大学学生・教職員、明大カード会員、明治大学リバティアカデミー会員、明治大学博物館友の会会員は会員証等の提示で無料。一般の高校生以下の生徒児童及び引率者、障がい者手帳等をお持ちの方と介助者の方も無料。)

会場：明治大学博物館特別展示室(明治大学駿河台キャンパスアカデミーコモン地下1階)

開館時間：10:00~17:00(入室は16:30まで)

主催：明治大学博物館 協力：日英共同調査グループ・Gowland Project 後援：朝日新聞社

助成：芸術文化振興基金助成事業 

明治5年(1872)、いわゆる「お雇い外国人」技師として来日した、英国人のウィリアム・ガウランド(William Gowland, 1842-1922)は、以後16年にわたって大阪・造幣局(来日時は造幣寮)に勤務して要職を歴任し、日本の産業振興に貢献しました。

一方で、彼の名はむしろ本業以外でよく知られており、特に著名なのは「日本アルプス」の命名です。これは鋳山の調査出張を兼ねて余暇として楽しんだ趣味の登山によるもので、来日後、生涯にわたって交流を重ねたイギリスの外交官、アーネスト・サトウが刊行した旅行ガイドに掲載されています。

その登山とともにガウランドが熱心に取り組んだのが日本の古墳の調査と研究でした。ガウランド自身は、イギリスの化学系の王立学校出身であり、考古学を専門的に学んだ経験はありませんでしたが、造幣局着任後にアーネスト・サトウ(群馬県前橋市前二子古墳について学会で発表した)や、サトウの同僚のジョージ・アストン(『日本書紀』の研究者)と交流を重ねるなかで日本の古墳に興味を持ち、数百基に及ぶ各地の古墳を調査し、その記録と研究に基づいた論文をイギリス帰国後に発表しました。

ガウランドの調査と研究で特筆されるのは、その先進性です。①ヨーロッパでもまだ主流ではなかった区画区分法(発掘区を設定し、区画ごとに出土した土器や石器を記録して回収する発掘方法)を日本で初めて行った、②古墳の墳丘や石室(棺を納めるために石で構築した部屋)について精密な測量図と写真という形で調査記録を作成した、③収集した出土品を、出土古墳

または出土地域、購入先などを細かく記録して残した、④『日本書紀』を中心に、文献と「天皇陵」古墳を対比させて研究した、⑤把握していた限りの前方後円墳や大型の石室をもつ古墳の全国的な分布図を作成し、それらの集中部に政治勢力が存在していたと推測した、というように、現代の古墳の発掘調査や研究にほぼ近い手法を約130年前にすでに行っていたのです。

彼の研究は、日本の古墳研究の先駆けとして高く評価されていますが、コレクションが日本から遠く離れたロンドン・大英博物館に収蔵されていることもあり、大塚初重・明治大学名誉教授や後藤和雄氏(元朝日新聞編集委員)、ヴィクター・ハリス氏(元大英博物館日本部長)などによる近年の研究で概要が明らかになってきたものの、その具体像はバールに包まれたままでした。

今回の特別展では、ガウランド・コレクションを収蔵する大英博物館と、明治大学も加わっている日英共同調査グループ・Gowland Projectの協力を得て、ガウランドが収集した古墳出土資料や彼が作成した調査図面、アーネスト・サトウをはじめとする当時の研究者との交流を示す手紙、古墳を撮影した写真といった資料に国内の関連資料を交え、最新の研究に基づいたガウランドの古墳研究の実像に迫ります。

大英博物館のコレクションは、日本国内では初めての公開となるのはもちろんのこと、大英博物館でも未公開だった貴重な資料が含まれます。この機会にぜひご覧ください。

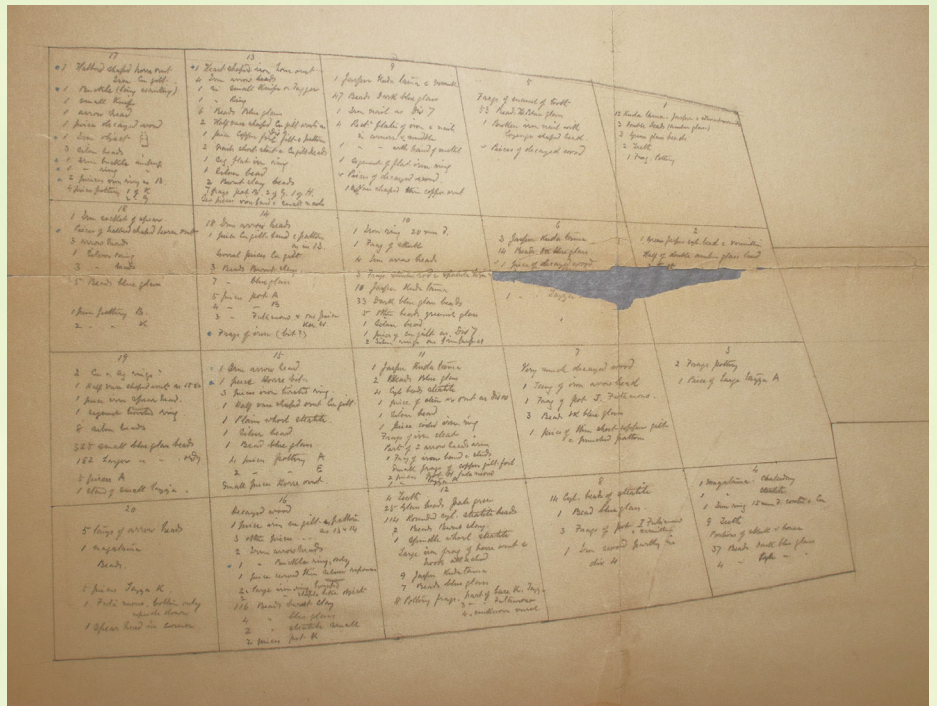


伝埼玉県出土の女子埴輪

(6世紀、大英博物館蔵 ※展示はレプリカ)

長らく大英博物館日本展示室の入口に展示され、「顔」ともなってきた埴輪。ガウランド・コレクションを代表する門外不出の資料ですが、3次元計測データをもとに、精巧な複製レプリカの制作と展示が初めて実現しました。

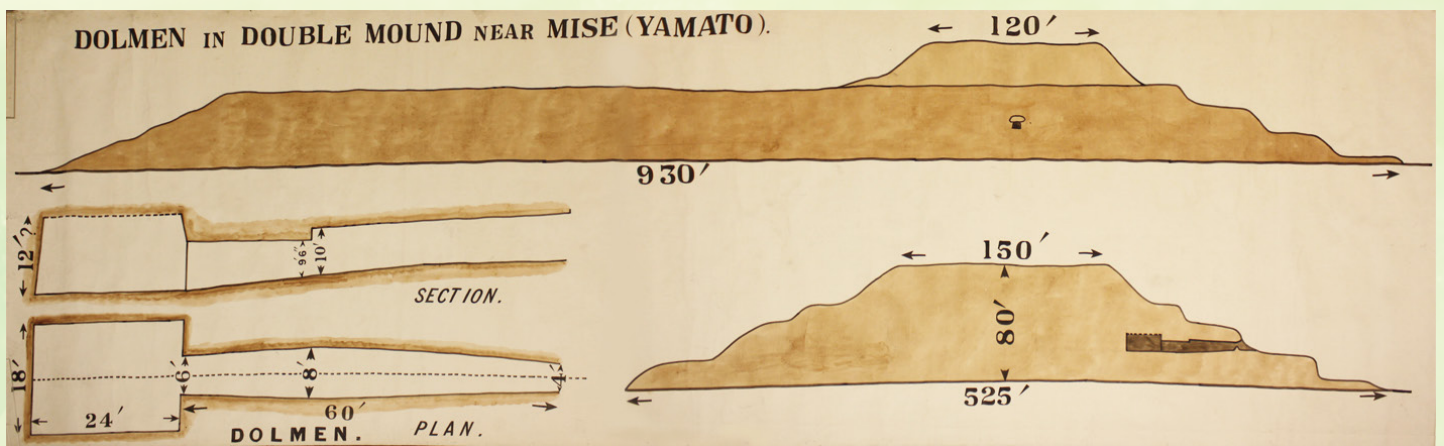
(写真提供: Gowland Project)



日本で初めて区画区分法を用いて発掘した調査の図

(1888年、大英博物館蔵)

大阪府にかつて存在した芝山古墳を発掘調査した際にガウランドが作成した調査図面。横穴式石室の床面を20区画に区切り、それぞれの区画から土器や玉、鉄製品、人骨などが何点出土したのかを詳細に記録しています。この記録のおかげで、埋葬当時の棺の数や配置場所を130年後の私たちが推測することができるのです。この手法を基にした発掘方法が現在でも行われており、この図は日本の近代的な古墳発掘の原点ともいえる貴重なものです。写真による記録方法とあわせ、130年前にいち早くこうした先進的な手法をとっていたことは驚きです。



学会発表時に制作した五条野(見瀬)丸山古墳の図面

(写真は一部合成、19世紀末、大英博物館蔵)

五条野(見瀬)丸山古墳(畝傍陵墓参考地)は日本最大の横穴式石室をもつ全長310メートルの巨大な前方後円墳です。被葬者は欽明天皇など当時の最高権力者クラスの人物が想定されています。「天皇陵」と横穴式石室に高い関心を持っていたガウランドは、この古墳についても実地に調査し論文で言及しています。この図は帰国後にロンドンの学会発表の際に制作されたと思われるもので、全長は5メートルに及びます。実物が展示されるのは国内外通じて初めてのことで。

(All photos courtesy of The British Museum)

表紙写真: ①大阪府塚原古墳群の石室に立つガウランド(原品は大英博物館蔵、後藤和雄複製、明治大学博物館寄託): 当時実用化されたばかりのガラス乾板を使って古墳の墳丘や石室の内部の写真を数多く撮影しており、写真のほうが図よりも情報が格段に多く、記録方法として優れていた点にガウランドは早くから気づいていたようです。このカットは、ガウランド自身が写っている貴重な1枚です。

②伝群馬県出土の装飾付脚付広口壺(6世紀、大英博物館蔵、Gowland Project提供): 壺の上部に鳥や馬、鹿の小像があり、古墳時代人の世界観の一端が表現されているといわれる土器。西日本で古墳の副葬品としてよく用いられましたが、関東地方の出土例は極めて少なく、古墳文化の広がりを考える上で重要な資料です。高さ52.5cm。日本初出展。

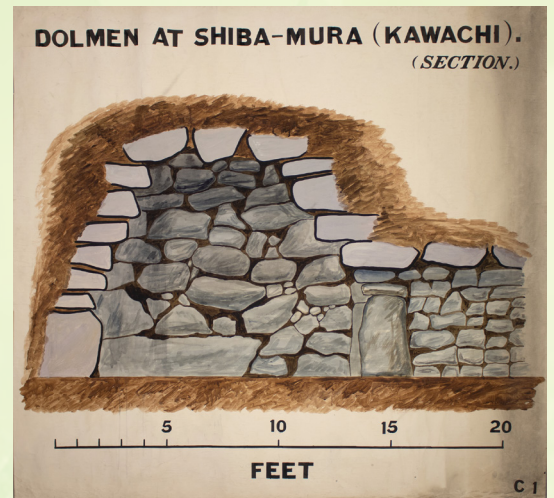
関連講座

明治大学リバティアカデミー連続講座 第63回「考古学ゼミナール」 「ウィリアム・ガウランドと古墳研究—大英博物館に残された“学術の遺産”」

近年の学術調査によって明らかとなった成果をもとに、大英博物館というタイムカプセルに残されたガウランドの「学術の遺産」を読み解きます。

全4回シリーズ(毎回金曜日) 時間:18:00~20:00 受講料:5,000円

第1講	10/26	ウィリアム・ガウランド-その生涯と古墳研究 忽那敬三(明治大学博物館) 造幣局での業績、登山、写真に代表される古墳研究など、その人物像と事績について紹介します。
第2講	11/9	ガウランドが伝えた「遺産」-京都府鹿谷古墳群の記録と出土資料- 諫早直人(京都府立大学) 大英博物館所蔵ガウランド・コレクションの調査によって明らかになった鹿谷古墳群の最新成果を紹介します。
第3講	11/16	ガウランドの「ドルメン」研究とその協力者たち 富山直人(神戸市立図書館) 古墳研究の契機と協力者たちの存在、さらに日本で学んだ知識を生かしてどのように「ドルメン」研究を進めたのかを紹介します。
第4講	11/30	日本の古墳研究第一人者としてのガウランド 一瀬和夫(京都橘大学) 墳丘の調査、分布、文献を総合的に検討し、古墳と王権の関係を見出した先見的な研究について紹介します。



大阪府芝山古墳の石室実測図(学会発表用に大型化したもの)
大型図版化したためやや精度が粗くなっているが、石室を構成する石材の大きさや形状、天井部になるほど狭くなる状況がスケールとともに正確に記録されている。
(大英博物館蔵、Photo courtesy of The British Museum)

講座の申込み・お問い合わせ: 明治大学リバティアカデミーホームページ
<https://academy.meiji.jp/course/detail/4423/>

学芸員によるギャラリー・トーク

本展示の見どころと展示では紹介しきれなかったコレクションの魅力を担当学芸員が解説します。

開催日: 10月13日(土)、10月28日(日)、11月3日(土・祝日)、12月1日(土)

開催時間: 13:00~13:45 集合場所: 特別展示室 *参加無料・事前申し込み不要。

関連展示

明大コレクション展「ガウランド研究のあゆみ」

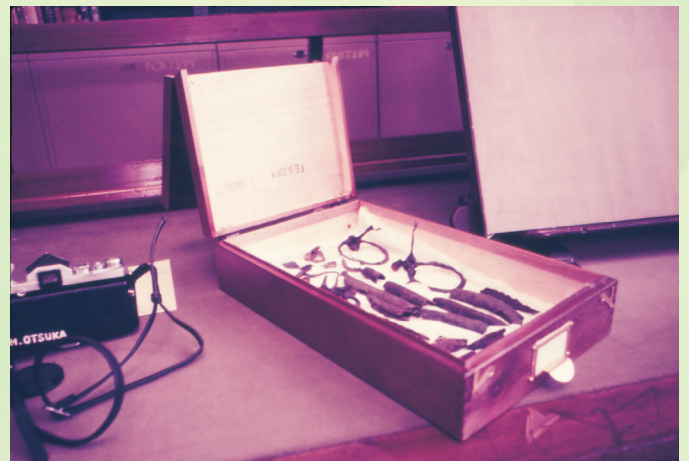
会期: 開催中~2018年12月9日(日)まで

会場: 明治大学博物館 地下2階常設展示室 考古部門エリア (観覧無料、会期中無休)

早くから大英博物館のガウランド・コレクションに着目し、昭和42(1967)年に初めて現地で総合的な調査を手掛けた本学名誉教授の大塚初重氏から当館に寄贈された資料を中心に、ガウランド研究のあゆみを紹介します。



1967年当時の大英博物館



1967年のガウランド・コレクションの収蔵状況。
左に大塚氏のカメラが見える
(大塚初重氏撮影、明治大学博物館蔵)

博物館来館者数が100万人を突破しました

2018年8月22日、2004年のリニューアルから約14年で、累計来館者数が100万人を突破しました。

記念すべき100万人目の来館者となったのは、夏休みの課題のため博物館見学に訪れていた千葉県の高校生、大宮純音さんと森永珠己さん。井上崇通館長（商学部教授）が来館100万人目の認定証とミュージアムグッズなど記念品を贈呈しました。

長い歴史を持った「商品博物館」、「刑事博物館」、「考古学博物館」の3つを統合した現在の明治大学博物館は、2004年のアカデミーコモン竣工とともにリニューアルオープン。常時約2000点の資料を見学できる常設展示室をはじめ、企画展示を行う特別展示室、学習会や講習会につかう教室などが設けられています。2017年度には年間来場者数が初めて10万人を突破しました。



100万人目の来館者のお2人(中央)と井上館長(左)

展覧会の報告

企画展「明大考古学の過去・現在・未来—モノ学のその先へ...—」を開催しました

1950年の文学部考古学専攻そして1952年の考古学陳列館の設立にはじまる明治大学の考古学は、静岡県登呂遺跡、群馬県岩宿遺跡、神奈川県夏島貝塚など、戦後の新しい歴史構築にとって重要な遺跡の発掘を数多く手がけ、戦後考古学の発展に貢献しました。

本展覧会は、明治大学文学部考古学専攻と明治大学博物館が企画し、2018年5月26・27日に明治大学を会場として開催された日本考古学協会第84回総会に合わせ、同実行委員会が主催しました。会期は2018年5月21日（月）～6月21日（木）で、32日間の会期中4,000人を超える入場者があり、研究ブランドとしての明大考古学の発信に大きく寄与しました。

展示ではまず、戦後からおおむね前世紀までに展開した旧石器、縄文、弥生、古墳各時代の研究のあゆみを紹介しました。そして現在の明大考古学の特色の一つとして、これまでの考古学の基準資料となっている長野県矢出川（旧石器）、北海道置戸安住（旧石器）、茨城県法堂（縄文）などの遺跡を現在的な視点や分析手法から見直し、あらたな学術価値を見出す研究「文化資源としての基準資料」を紹介しました。これは、前述の考古学協会総会のセッションとしても企画し、成果を公開しています。

加えて、学際的・国際的研究の推進を目的に設置されている考古学関係の研究施設や現在進行中の研究プロジェクトの最新成果も展示し、明大考古学の将来的な展望を紹介しました。最後に考古学と社会とつながりへの明大考古学の貢献として、本学考古学専攻の卒業生を中心に各地で推進されている地域の埋蔵文化財の利活用事業などをパネルで紹介しました。

なお、展覧会パンフレット（16頁）は博物館ホームページの本展覧会記事からダウンロードできます。



企画展「明大考古学の過去・現在・未来—モノ学のその先へ...—」のポスター

中国革命宣伝画

プロパガンダ芸術の頂点^{※1}

中村達雄 (明治大学現代中国研究所客員研究員)

本年(2018)1月10日から30日までの21日間、明治大学現代中国研究所は前年8月に石井知章・鈴木賢編で刊行した『文化大革命 <造反有理>の現代的地平』(白水社、2017年)の連動企画として、出版元の白水社の後援を得て明治大学博物館において「中国革命宣伝画展」を開催した。比較的に短い期間だったにもかかわらず、延べ3400人以上の参観者を迎えることができ、盛況だった。

革命宣伝画(プロパガンダ・ポスター)は1949年10月1日の中華人民共和国の建国以来、同国を一党独裁統治する中国共産党の正統性をプロパガンダするとともに、最高指導者だった毛沢東を無欠で至高の存在として個人崇拜し、その思想を普及させ、海原の如くに広大な中国の大地に暮らす人民に偉大な領袖を可視化するための政治的な増幅装置だった。

揺籃としての延安

革命宣伝画の揺籃は中国陝西省北部(陝北)の黄土高原に位置する延安にある。その手法は単純で、中国共産党の革命史観に基づいて善悪を明確に区別し、無産階級の労働者(工)、農民(農)、軍隊(兵)のいわゆる「工農兵」を、それらを指導する毛沢東や共産党とともに大きく、明るく、爽やかに描き、国民党や日本軍、そして有産階級を卑屈に、小さく、暗く表現した。この手法は中国の建国後も人民を教化、支配する装置として進化し、文化大革命の混乱のなかでその頂点を迎えた^{※2}。

戦間期の1930年代、蒋介石は全国統一の一環として、江西省に拠点築いた中国共産党に対して前後5回にわたる掃共作戦を実施し、各根拠地を包囲攻撃した。これに耐えきれなくなった中共軍は1934年10月16日未明、瑞金の江西中華ソヴィエトを放棄し、雩都県の郊外を流れる貢水河畔に隊列を整え、全行程1万2千キロの「長征」(ロングマーチ)と自称する新しい根拠地を模索するための行軍を開始する。1年後、陝北にたどりつき、1937年1月、延安に赤色根拠地を再構築した。

盧溝橋事件の勃発などで中国の進歩的人士、若者の間に抗日機運が盛り上がると、積極分子が延安を目指した。中共は延安に文芸幹部を養成するための魯迅芸術学院を創立し、そこに上海からやってきた一八芸社^{※3}の胡一川、江豊らが加わり、版画の大量印刷技術による革命宣伝画が生まれた。これが中国において木版画と政治宣伝を結びつけた革命宣伝画の濫觴である。

プロパガンダとしての革命宣伝画

展示したポスターを分類していくと、中国共産党万歳、毛沢東思想万歳、個人崇拜、建国・国慶、社会主義建設、文化大革命、八つの革命模範劇、国際共闘などの8種類に大別できよう。

<中国共産党万歳>と<毛沢東思想万歳>は、多くの場合セットで描かれ、毛沢東が中国共産党の至高の指導者であり、党が毛沢東思想を体現していることを強調している。工農兵が毛沢東選集や毛語録を掲げて熱狂を創出し、頭上では赤い太陽のように配置された毛沢東がその思想を照射し、工農兵がそれを余すところなく浴びるというわかりやすい構図だ。

<個人崇拜>には、その対象として毛沢東、林彪、華国鋒らが登場してくる。毛沢東はポスターのなかで大きく、凛々しく、理知的に描かれている。林彪は常に毛沢東に寄り添うように表現され、毛沢東の威光を借り、後継者に相応しい指導者として描かれている。四人組粉碎に功労のあった華国鋒が毛沢東の書斎で手渡されたとされる「你辦事、我放心」(あなたがやれば、私は安心だ)のメモを根拠に、毛沢東の正統な後継者であることを宣伝したポスターも注目される。

<建国・国慶>には、1949年10月1日に天安門城楼で挙行された開国の大典があり、毛沢東が天安門広場に参集、整列した無数の工農兵に向かって中国の建国を宣言し、その背後では宋慶齡、劉少奇、朱徳、周恩来ら中共の指導者がそれを見守っている。また、節目となる年の国慶節やメーデーを題材にとった革命宣伝画も大量に存在する。

<社会主義建設>で目を惹くのは、「人民公社好」(人民公社は素晴らしい)だ。黄金色に実った雑穀のなかを、麦藁帽子に白シャツ姿の農民に愛される姿を演出した毛沢東が「大躍進」の豊作に満足している姿を描いたものだ。

<文化大革命>を描いた革命宣伝画は膨大な数にのぼる。なかでも「炮打司令部」(司令部を砲撃せよ)は1966年8月、毛沢東が執務室で劉少奇、鄧小平ら資本主義の道を歩む実権派の打倒を全国に号令するため、まさに「炮打司令部」の赤い墨跡鮮やかな大字報を書き上げた瞬間を描いたものである。背景には赤色中国の全図が後光を射している。これは党中央に資本主義の司令部があり、その司令官が劉少奇だとする毛沢東の考えを如実にあらわしたものであろう。

<八つの革命模範劇>は、『知略で威虎山を攻略する』、『海港』、『紅灯記』、『沙家浜』、『白虎団を奇襲する』、『紅色娘子軍』、『白毛女』、『竜江頌』の話劇(新劇)のことだ。いずれも毛沢東が1942年に延安の文

芸座談会*4で行った講話の精神に基づいて制作されたもので、娯楽の少なかった文化大革命期に映画化され、文革の推進に一定の役割を果たした。

<国際共闘>は米ソ両超大国による冷戦構造が進むなか、中国がアジア・アフリカ・ラテンアメリカ諸国と共闘し、ともに超大国に対峙する目的で政策された革命宣伝画である。代表的なものに「全世界人民団結起来、打倒美帝!打倒蘇修!打倒各国反動派!」がある。中空に浮かぶ軍服姿の毛沢東が自信たっぷりに凛々しくポスト超大国時代の地平を見据え、その下で毛沢東選集や紅旗を掲げた工農兵と第三世界諸国の人民が共通の目標を掲げてともに闘う情景が描かれている。

革命宣伝画には「工農兵」および少数民族などが多く描かれたが、それらの人々は一様にひとつの表情しか持たない。それは毛沢東(赤い太陽)と毛が人民の教化と統治に利用した装置としての共産党(紅旗)に正統性を調達するため、恣意的にデザインされた人民の顔である。革命宣伝画に表現されたこの顔の表情はそれを見る圧倒的多数の人民に感染し、感染を拒否した個性(ある顔)は多くの場合、反革命分子として断罪され、粛清された。革命的にデザインされた顔は常に「覚悟」(革命的自覚)が高い表情で、毛沢東と中共に無条件で忠誠を誓う幻想をねつ造し、革命宣伝画を見る人に「自分もそうあらねばならない」という錯覚を起こさせた。その錯覚を起こすことの出来なかった人民は苦悩の末、自分に対して「革命の自覚が足りないのだ」と無理矢理に

思い込ませ、毛沢東と中共の独裁支配を受け入れたのである*5。

革命宣伝画に印刷された毛沢東の肖像は、本人と同等の権力と影響力を具備する身体となっていた。これを見た人民にはたとえ見知らぬ者どうしても社会主義建設に邁進する革命分子としての連帯感と共通認識が生まれ、それが文革の狂気として一人歩きしはじめた。中国現代史における文化大「革命」とは真正の革命に対する悪質なパロディであり、冒涇であった。

*1 本稿は拙稿「革命宣伝画の起源とその展開」明治大学現代中国研究所・石井知章・鈴木賢編『文化大革命 <造反有理>の現代的地平』(白水社、2017年)の内容を書き直して再構成したものである。

*2 牧陽一・松浦恒雄・川田進『中国のプロパガンダ芸術』(岩波書店、2000年)序章を参照。

*3 1930年5月に杭州で旗揚げした。春地美術研究所とも称する。国立杭州芸術専科學校の西湖一八芸社から分派した組織で、翌年には上海一八芸社に発展する。胡一川、江豊、陳広らメンバーの多くが、早くから宣伝媒体としての木刻(版画)に着目していた魯迅の薫陶を受けて技術を上達させた。

*4 1942年5月、中共党内に小市民的な個人主義や自由主義的意見が広まっていることに危機を感じた毛沢東は延安の革命根拠地で文学芸術座談会(党内シンポジウム)を開き、文芸は人民大衆すなわち労働者、農民、兵士(工農兵)が革命工作を遂行するのに役立つものでなければならない、とする方針を打ち出した。それは後に「趙樹理方向」というベクトルに収斂し、文芸全般に大きな影響を与えた。竹内実「洞窟の文学から都市の文学へ」岩波講座現代中国第五巻『文学芸術の新潮流』(岩波書店、1990年)10-14頁を参照。

*5 筆者が1970年代末から80年代初にかけラジオペンキで対日プロパガンダ放送に従事していたころの同僚の述懐をもとにしている。



革命宣伝画展の告知チラシに使った「司令部を砲撃せよ」のポスター。これが文革発動の合図になった



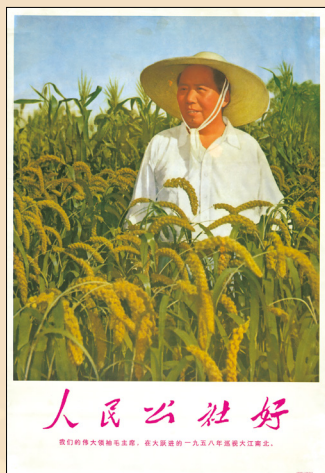
展示会場の一隅。ポスター以外に、関連書籍、毛バッジとその金型、地図、文革写真、雑誌など600点以上を出品した



教会の跡地に開いた魯迅芸術学院。革命宣伝画はここで生まれた



毛沢東と中国共産党を讃える革命宣伝画「毛沢東同志を領袖とする中国共産党万歳!」



人民公社を全国に普及させるきっかけとなった革命宣伝画「人民公社は素晴らしい!」



革命模範劇のポスター「知略で威虎山を攻略する」

関東近世城郭における瓦研究の現状

金子 智 ((株) 乃村工藝社)

● 城郭と瓦

日本における瓦の使用は、6世紀末、奈良の飛鳥寺造営に朝鮮半島の工人(「瓦博士」)が来朝したことに始まると伝えられる(『日本書紀』)。そしてそれ以来、古代・中世の長い期間、瓦はもっぱら寺院(と一部の官衙)に使われるものであった。

瓦が現在のように民家に使われるようになったのは比較的新しく、江戸時代になってからである。そのきっかけとなったのが、織豊系城郭における瓦の使用である。

中世以前の城郭は、主に高い山や丘に築かれた山城であり、城内に瓦葺の建物はなかった。この段階では、城自体が恒常的な居住を考慮したものでなく、臨時的・戦略施設的な色彩が強かったため、そこに造られる建物も板葺や茅葺などのシンプルな構造のものが多かったと考えられている。

瓦を本格的に採用した最初の城郭として著名なのが、天正4年(1576)に完成した織田信長の安土城である。これ以前にも松永久秀の多聞城などで瓦の使用が確認されているが、城の主要な建物に瓦が使用され、後世の城造りに大きな影響を与えた点で、安土城は一つの転換点を示す城郭として重要である。

安土城以後、瓦は織田・豊臣政権とその影響下にある大名のいわゆる織豊系城郭に、積極的に採用されていった。重厚な瓦葺の天守や櫓などが造られるようになるのはこのころからである。江戸時代には、全国各地の城で瓦は必須のものとなった。

瓦を使用する城郭は、当初は織豊政権の中枢に近い畿内や東海、あるいは西日本が中心で、関東・東北など東日本では少なかった。たとえば関東地方には、後北条氏による大きささまざまな規模の多くの城が存在するが、そこには瓦は使用されていない。

関東の城郭で瓦葺が使用されるようになるのは後北条氏滅亡後の、天正末年以降である。

● 近世初期の関東の城郭における瓦の使用

安土・桃山時代の織豊系城郭(あるいは織豊城郭)にはそれ以前の城郭にはない(あるいは顕著でない)特徴があることがつとに指摘されている。瓦・石垣・礎石建物の存在がそれで、織豊系城郭の3要素とも称される。

この3つの要素はその後の近世城郭に受け継がれ、現在のわれわれのもつ「日本の城」のイメージを形作るものとなっている。

関東で最初に造られた織豊系城郭は、小田原市の石垣山城である。石垣山一夜城とも呼ばれ、豊臣秀吉が小田原攻めにあたり、近接する山上に築いた陣城である。陣城とはいえ本格的なもので、秀吉自身によるまさに織豊系城郭の本流であり、上記3要素を備える。

石垣山城から出土する瓦は、近世関東の城郭瓦の中でも最も古様を示し、丸瓦の凹面には「コビキA」と呼ばれる斜め方向の糸切痕が観察される。



石垣山城の瓦(明治大学博物館所蔵前場コレクション)

これ以降、関東でも瓦を使用する城が散見されるようになるが、徳川政権確立前後の16世紀末～17世紀初頭に遡る確実な事例はわずかである。

群馬県の沼田城は、16世紀末の真田氏の作事に際し

て、瓦を使用している。真田氏は豊臣家との縁が深く、早い段階で畿内からの技術導入があったことがうかがわれる。沼田城では、この時期に特徴的な金箔瓦（瓦の文様部分に金箔を貼ったもの）も確認されている。

栃木県佐野城は佐野氏の居城で、ここでも16世紀末～17世紀初頭の瓦が出土している。早くに廃城になったため、近世初頭段階に限定される事例として貴重である。

東京都の江戸城でも、初期に開発された武家地から17世紀初頭以前と考えられる瓦が確認されている。金箔瓦も散見されるが、一部は関西の城郭から移送された、やや時期の遡るものかもしれない。

神奈川県の小田原城では、後北条氏段階には瓦は使われていないが、徳川政権下では早い段階で瓦葺が存在したことが、初期に埋め立てられた堀の遺物などから確認されている。

これ以外にも、江戸初期慶長年間に構築された城郭では17世紀初頭段階に遡る可能性のある瓦が散見される（土浦城・前橋城など）。ただ後世の瓦と混在して出土するため、時期を特定するに至っていない。

●近世関東の城郭瓦研究

近世の瓦の中でも、織豊期の瓦は関東では類例が少ないため、早い段階から注目されてきた。1994年に織豊期城郭研究会によって集成された資料集『織豊期城郭の瓦』には沼田城・石垣山城の瓦が紹介されている（2018年9月改訂版発行予定）。

この時期の城郭の調査例は多くないが、各城郭で出土瓦の分析が行われてきた（上石統子・大島慎一1995「石垣山城出土の瓦」『織豊期城郭』第2号など）。中でも佐野城は近年調査例が蓄積されつつあり、先行する寺院由来と思われる中世瓦を含め、分析が進んでいる（佐野市教育委員会2009『佐野城跡（春日岡城）Ⅴ』など）。

一方、徳川政権下の城郭においては、近年の近世遺跡の調査の増加に伴って、各城郭で瓦の研究も次第に行われるようになってきた。

江戸時代の城郭の瓦は、当初は城内や有力家臣（江戸城の場合は大名）の屋敷を中心とした使用に留まっていたが、次第に小禄の武家や町家の建物にも普及していった。江戸中期には、都市部においてその防火性が注目され、軽量な棧瓦の誕生もあいまって、瓦葺は広く利用されるようになっていった。

この段階の関東の城郭における研究状況をみると、江戸城下は、発掘調査例が多いこともあり、瓦研究も比較的進んでいる。江戸城下の瓦で注目されるのは、江戸後期に城下を中心に生産されたと考えられる、江戸地域に特有の近世瓦の様式（「江戸式」）である。

1980年代末に加賀藩前田家江戸屋敷（東京大学本郷構内遺跡）の瓦を分析した加藤晃は、江戸市中から出土する江戸時代後期の軒平瓦（および軒棧瓦軒平部）文様に共通性を見出し、これを「江戸式」と呼んだ（加藤晃1989「江戸時代の瓦における「江戸式」の展開」『國學院大學日本史学専攻大学院会史学研究集録』第14号）。

17世紀中葉に出現するこの文様は、同じ文様構成のまま幕末まで継続し、江戸在地系の瓦の指標となることがわかっており、セットをなす他の瓦種とともに1つの瓦の様式と捉えられる。その成立は江戸地域（江戸城及びその城下）における瓦の恒常的生産体制が確立したことを示すものと考えられ、その影響は関東全域の城郭に及んでいる。



「江戸式」(江戸城三の丸出土・筆者撮影)

江戸城以外の城郭の瓦については、城下での各藩の御用瓦師による生産品とともに、江戸後期には江戸近郊の大産地からの移入品（あるいはその技術的影響下にある在地の生産品）で構成されるものと思われる。

関東の城郭における在地の瓦生産の具体相についてはいまだ不明瞭な部分が多いが、発掘調査の進む前橋城や高崎城、土浦城（土浦城跡第三次調査会『史跡土浦城跡Ⅱ』など）、小田原城（上石統子2005「小田原城及び城下における瓦の変遷」『小田原市郷土文化館研究報告』33）などで分析が進められている。

一方搬入品については、江戸城での大坂や東海地域の瓦、関東諸城郭における「江戸式」の存在などが注目される（金子智1996「江戸遺跡出土資料に見る近世軒平瓦・軒棧瓦の地方色」『古代』第101号）。製品の流通、あるいは製作技術の伝播など、そこには多くの要因が考えられるが、未解明な部分が多く、今後の研究の進展が期待される。

黒曜石原産地における 先史狩猟採集民の行動系(2)

島田 和高 (考古部門学芸員)

1. 黒曜石原産地の黒曜石遺物を原産地分析する?
2. 広原II遺跡の概要と原産地分析
3. 原石と石器の礫面から分かること (以上前号に掲載)

4. 広原II遺跡4層石器群の原産地分析結果

長野県長和町にある広原II遺跡では、縄文文化層の原産地分析結果も得られているが、ここでは、局部磨製石斧をとまなう後期旧石器時代前半期(以下、EUPと略す)の4層石器群(約3.5万年前)の分析結果に焦点を当てる。4層石器群の2401点を分析した結果、原産地が判別できた石器は全体の69.6%で残り約3割は判別不可ないしは未測定である。以降、図2に示した原産地(元素組成グループ)の記号と名称を参照されたい。判別された原産地のうち、判別不能・未測定を除く全体の93%を占めるのは、MT(58.5%)、W(18.0%)およびHH(16.6%)であり、広原II遺跡で最も多用された原産地である(図2の円グラフ)。一方、K、M、BH、T、B、H、FS、Msといった原産地も2.1%~0.1%の比率で判別された。最後のMsは図2の地図の外側、北八ヶ岳にある麦草峠・冷山原産地の黒曜石である。その他に、複数の元素グループにまたがってしまう曖昧な判別群が1.5%あり、これらは考古学的分析には使えないので判別不可と同じく除外する。

最も多量に広原IIに持ち込まれた黒曜石はMTである。ただし、図2で確認してほしいが、MTは男女倉の深い谷を挟んで直線距離で約5 km離れた東餅屋と鷹山の原産地で同じ元素グループに判別されてしまう。これは両者の黒曜石が同じ噴火に由来する火砕流を起源としているためと考えられている。地質学的にはダイナミック

で興味深い現象ではあるが、人間の行動を扱う考古学にとっては、どちらの原産地を利用したのか分からないために厄介だ。

この問題について、今回の産地分析結果から以下のように判断できる。T(ツチャ沢)、H(本沢)、B(ブドウ沢)、BH(ブドウ沢・本沢尾根)、M(高松沢)など東餅屋原産地・広原遺跡群と鷹山原産地との間に位置する男女倉谷一帯の黒曜石は、今回の分析では合計しても全体の2.8%である。こうした状況の中では、同じMTに判別される鷹山の黒曜石がたとえ広原に持ち込まれていたとしても、考古学的な考察に大きな影響は与えない程度の僅かな比率であると考えられるので、今回のケースでは鷹山(MT)の黒曜石の搬入と利用については基本的に考慮しない。

5. 原産地分析結果が意味するものと限界

原産地別の利用比率には、広原第II遺跡と原産地との地理的な傾向がはっきり現れている。つまり、遺跡からもっとも近いMT(東餅屋)が最も多量に石器群に残され、相対的により遠いW(和田峠)、HH(星ヶ塔・星ヶ台)がそれぞれほぼ同率で判別されている。MT原産地は、和田川の源流付近に位置し、南側の中央分水界を超えると一連のW原産地に到達する。W原産地は比較的密集している。一方、HH原産地は、元素組成グループとしては帯状に広く分布する一連の原産地となり、相互の区別はできない。男女倉谷一帯の原産地は、HHなどに比較すると距離的には広原II遺跡に近いのだが、先にも述べたように4層石器群での利用は低調である。尾根上にある広原遺跡群から見ると、深い谷となる男女倉一帯の原産地の地理的な影響があるのだろうか。これらに対して困惑するのは、

北八ヶ岳に位置するMs(麦草峠・冷山)である。剥片が2点だけ判別されていて、これらは肉眼でも特徴的な石質であり他と区別できる。同じ中部高地とはいえ、図2の地理的スケールではMT、W、HHから見ると別次元のエキゾチックな原産地である。どのようにしてMsの黒曜石が広原遺跡群にもたらされたのだろうか。

以上はあくまで、元素分析用のサンプルとして原石を採取した場所をもとに話しをしている。つまり、原産地(分析用サンプルを採取した地点)と遺跡という「点と点を線で結んだだけ」だ。確かにそれだけでも、広原II遺跡に持ち込まれて加工された黒曜石が、近場のMTだけではなく、量的な格差を示しながらも、中高地に分布する多様な原産地から獲得された黒曜石に由来するという成果は、新しい知見であり重要ではある。しかし私としては、これでは物足りない。先史時代の黒曜石獲得集団が具体的にどの場所ですべて実際に原石を採ったのか、面的に広がっていたと思われる黒曜石獲得の領域とそこで人間の行動をもっと復元したいのである。

6. 黒曜石獲得の領域

そこで今回の原産地データと前号で紹介した和田川流域の礫面状態の分類にもとづく原石分布インデックス(中村2018)を重ね合わせてみよう。図2には、4層石器群696点の礫面分類と原産地分析結果を照合した表を示した。遺物に残された礫面のうちC-Iは新鮮な角礫で、中村(2018)では露頭付近に分布すると推定された。同様に、C-IIは表面や角に細かな凹凸となる欠損があり、和田川の源流近くに分布する。C-IIIは表面に軽い水磨が認められ、和田川の1400 m~1250 m

- BHU：ブドウ沢・本沢・ウツギ沢・牧ヶ沢
- ◎ MT：東餅屋・鷹山
- BH：ブドウ沢・本沢尾根
- H：本沢上流
- T：ツチャ沢
- W：和田峠
- ▲ B：ブドウ沢
- ▲ HH：星ヶ塔・星ヶ台
- △ M：高松沢
- + FS：古峠・三ノ又沢
- × O：牧ヶ沢
- K：小深沢（ただし異地性原産地）

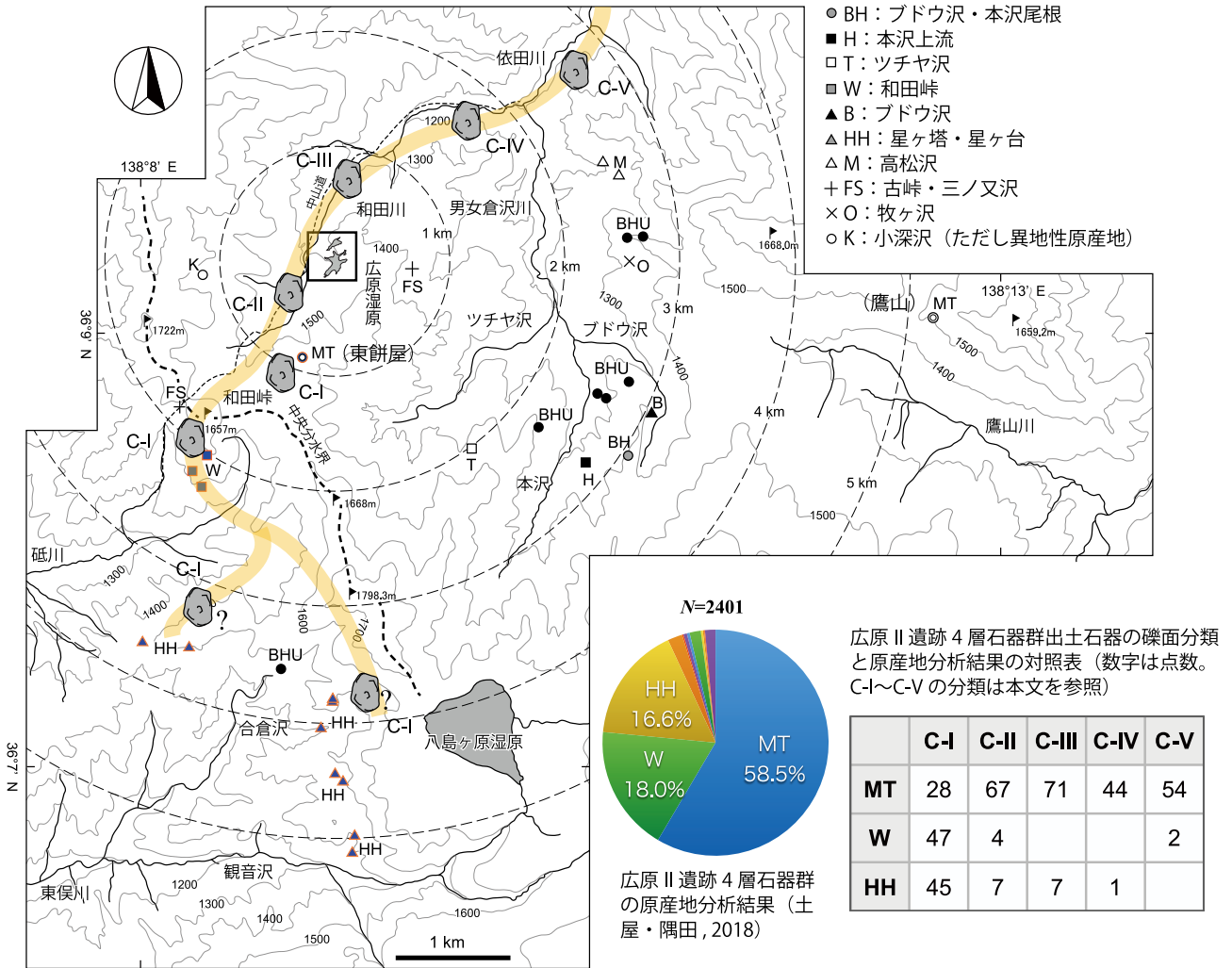


図2 長野県広原II遺跡4層石器群（後期旧石器時代前半期）の原産地分析結果と復元された黒曜石獲得ルート（太アミ線）（島田，2018を改変）

付近に分布する。C-IVは河床で揉まれた派手な衝撃痕が礫面の全面に認められ、和田川の1250 mから男女倉沢川との合流点まで分布する。最後にC-Vは衝撃痕が滑らかに水磨されほぼ円礫となり、依田川に数キロにわたって分布する（以上は、図の黒曜石アイコンに対応）。

図2の表によると、MTの石器ではC-IからC-Vの遺物が幅広く認められるが、これに対してWとHHの石器では、ほぼC-Iに偏る強い傾向がある。この結果は、まずWやHHの黒曜石が露頭周辺で限定的に採取されていたことを強く示唆する。つまり、WやHHが原石を供給している砥川と東俣川の流域は原石の獲得領域として利用されていなかったのである。一方、MT黒曜石の獲得領域は、MT露頭（東餅屋）とその周辺（C-I）に加えて、上流から見て和田川の全流域（C-II～C-IV）と、男女倉沢川との合流点から依田川数キロにかけて（C-V）の広範囲に展開していたことが判明した。

7.まとめ

以上の原産地分析結果、和田川流域の原石分布インデックスと遺物の対照結果をもとに、4層石器群を残したEUPの黒曜石獲得集団の行動を考察しよう。図2の太いアミ線で示したように、黒曜石獲得集団が描く原石獲得の行動は、依田川から和田川の全流域、さらにMT原産地にいたる原石獲得領域に最も濃密に足跡を残している。加えて、彼らの原石獲得領域は、和田峠（中央分水界）を超えて、W原産地、HH原産地に至る線状に伸びる獲得ルートを形成していたと評価できる。

今回は詳しく述べないが、4層石器群の考古学的な解析と原産地分析結果との照合によって、この獲得ルート沿いに4層石器群と同様の石器群が分散して形成されていた可能性が高いことも分かった。これは、黒曜石運搬の効率を考えるとMT、W、HHそれぞれの獲得地の近くで合理的に黒曜石加工を行うためだと考えられる。おそら

くHHやWに近いこれらの仮説的なEUP石器群では、原産地分析結果の量的な比率が広原IIとは逆転していくことだろう。

3万年前より古いEUPの中部高地では、いくつかの黒曜石獲得集団の獲得ルートがお互いに重ならないように決められていたのではないかと考えられる。複数の集団が黒曜石の山に入るなかで、時に接触する機会もあったのだろう。おそらく広原II遺跡ではエキゾチックな黒曜石である北八ヶ岳のMs（麦草峠・冷山）産の石器は、そうした集団どうしの交流の一環として入手されたのかもしれない。（完）

【参考文献】

- 島田和高2018「中部高地における後期旧石器時代前半期の黒曜石獲得をめぐる行動系：原産地分析の考古学的データ統合」『資源環境と人類』8（本記事はこの文献をもとに執筆した）
- 中村由克2018「黒曜石採集地の推定のための自然面解析法」『資源環境と人類』8

弩機—古代中国最強の武器

春秋時代末期～戦国時代（BC5世紀後半～BC4世紀頃）に成立したとされる有名な兵法書『孫子の兵法』に代表されるように、当時の中国大陸では早くから高度な戦術が発達していた。同時に、実際に合戦で使用される武器についても、周辺文化の要素を取り込みながら独自の発展を遂げていった。殷代から前漢時代にかけての合戦においては、青銅製の武器が普及していたが、矛や戈（長い柄に鎌形の刃が装着された武器）、剣などの他に、古代中国最強の武器とされたのは「弩」とよばれる射撃用の武器であった。明治大学博物館では、弩の中心的部品である「弩機」を収蔵している（図1・2）。今回はこの収蔵品についてご紹介しよう。

弩とは弓矢の命中率と飛距離を強化するために開発された武器であり、その形は弓の中央に矢の装着台が付き、装着台の後端には引き金がついている（図3）。発射の際は装着台を持ち、ライフル銃のように構える。引き金を引くと弦が解放されて矢が発射される仕掛けになっている。

弩機というのはこの引き金の部品のことを指し、いわば弩の心臓部分である。内部はさらにいくつかの部品から構成されており、それぞれ懸刀（引き金）、望山（照準を合わせる部分）、牙（弦をひっかける部分）、牛（牙のストッパー）と言う（図4左）。それぞれが歯車のかみ合っており、懸刀を引くことで牙を抑えていた牛が動き、牛から解放された牙が弦を解放する、という仕掛けになっている（図4右）。戦国時代まではこれらの部品がむき出しのまま木製の装着台の中に埋め込まれていたが、漢代以降はこれを保護するための銅製の囲い（郭）が開発され、これにより弩機の強度が増した。

本収蔵品を見ると、まず、上述の懸刀、望山、牙、牛などの部品が、郭に収納されているのがわかる（図1）。また、郭側面の中央部分には大きな丸い穴が空いている。これは、枢とよばれ

る心棒をはめ込む部分で、この枢軸を中心に各部品が連動するのである。郭の上面、望山や牙の側面をしてみると、銀による象嵌が確認できる（図2）。文様は蟠螭文と呼ばれるもので、戦国時代から前漢時代に流行し、青銅武器の他、銅鏡や漆器などにも施されたものがある。煌びやかな加飾からは、この弩機の持ち主の権力を窺うことができる。

郭に部品が収納されている点、文様の特徴などから、本収蔵品の年代は前漢時代と推定される。群雄割拠の戦国時代から中国史上初の統一王朝の誕生という社会大変革期の軍事において、精巧な武器の開発やその管理は列国の生き残りをかけた取り組みであった。本収蔵品の弩機はそのような社会において生産されたものであり、当時の最新鋭の技術が込められた武器であったと言えるだろう。

（川嶋陶子）

〈主要参考文献〉

- ・林巳奈夫 1972「中国殷周時代の武器」京大文学部人文科学研究所
- ・李天鳴 1984「中国早期の弩機」『故宫文物月刊』二卷三期 国立故宫博物院
- ・朱鳳瀚 1995「古代中国青銅器」南開大学出版社
- ・楊泓 2005「古代兵器通論」紫禁城出版社

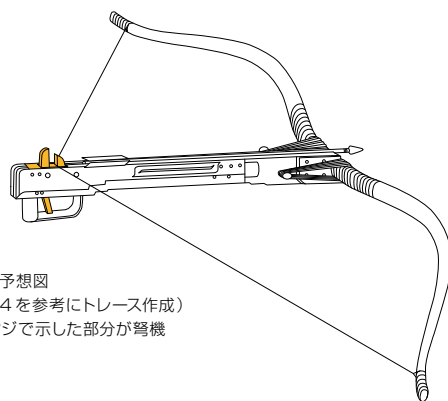


図3：弩の復元予想図
（李1984を参考にトレース作成）
※オレンジで示した部分が弩機



図1（上）：明治大学博物館所蔵漢代弩機
図2（右）：上面に施された象嵌文様

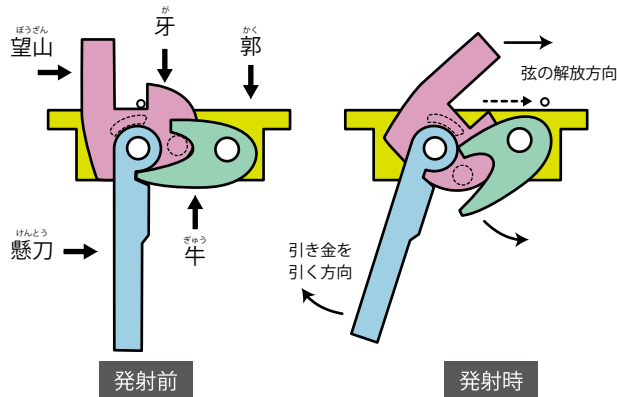


図4：弩機構成部品の名称と発射の構造

浮世絵と錦絵 ～当館所蔵の錦絵から～

普段展示をすることができないが、当館は比較的まとまった数の浮世絵を所蔵している。

ここでお聞きするが、浮世絵と錦絵の違いをご存じだろうか？浮世絵は文字通り“憂き世”の絵、当世について描いた絵画をいう。しかし、狩野派の当世風の絵画は浮世絵とは呼ばない。一方、過去の戦について描いた歴史画のようなものも浮世絵と呼ばれるので、実際には、浮世絵派の絵師が描いたものが浮世絵となる*1。では一体、浮世絵派とは誰のことか？という点だが、浮世絵版画の祖と言われる菱川師宣の系統を浮世絵派と呼ぶ*2。この浮世絵派が描く版画、肉筆画、挿絵を総じて浮世絵と呼ぶのである。では、錦絵はどうだろうか？浮世絵の中でも、多色摺(5ないし6色)の版画を錦絵と呼ぶ。多色の版画の名称なので、色彩が豊かであっても肉筆浮世絵は錦絵とは呼ばない。

浮世絵と錦絵の違いが分かったところで、次に当館の浮世絵である。当館所蔵の浮世絵は約800点ある。その多くが、東京都日野市の旧家から一括購入した明治期刊行の浮世絵で、あとは時代考証家名和弓雄氏から譲り受けた捕者関係の錦絵、法律・刑罰に関係するものや錦絵新聞、幕末期の墨摺版画があり、そして購入して集めていったものである*3。例えば、当館の浮世絵の中でも特によく利用のあるものは、齢八十九歳卍老人(葛飾北斎)の描いた『地方測量之図』(写真1)である。この錦絵は文に嘉永元年(1848)3月とあり、北斎が亡くなったのは嘉永2年(1849)なので、葛飾北斎の晩年に描かれた貴重な作品といってよいだろう。分量としては、戦争を題材とした錦絵が多い。戊辰戦争を始めとする明治期の戦争錦絵を約200点所蔵するなど、当館の浮世絵の約3割は戦争錦絵である。

当館所蔵の戦争錦絵の中から、戊辰戦争を題材とした錦絵のコラム展を8月29日から行っている。戊辰戦争が起こると、庶民は戦争についての情報を求めるようになった。そこで描かれたのが戦争錦絵であり、従来の錦絵よりもメディア性が強い。しかし、同時代の出来事や事件を描いてはいけないという旧幕府時



写真1 地方測量之図

代の規制を気にした版元は、過去の戦争や子供遊びに仮託した絵を描かせて刊行した。そのため、実在の人物の名前を堂々と書けず、家紋や藩の特産物などを描くことで、買い手に読み解かせていた。写真2の錦絵は明治7年(1874)刊行の大蘇芳年(月岡芳年)が描いた『東叡山文珠楼焼討之図』である。戦況伝達のものではなく、後年に歴史画として描かれたため、戊辰戦争をあからさまに描いている*4。その後の戦争錦絵においては、同時代の報道メディアとして確立したため、この違いは戊辰戦争の錦絵に見られる特有な現象である。このコラム展では、明治元年頃の仮託された作品と、その後歴史画として刊行された作品の双方を展示している。製作年代に注目し、ぜひ、実物でその違いをご覧いただきたい。(勝見知世)

*1 山口桂三郎1978『改訂 浮世絵概論』言論社

*2 浅野秀剛2002『錦絵を読む』山川出版社

*3 高野弘之2005『資料「明治大学博物館 刑事部門所蔵錦絵等 絵画資料目録」』「明治大学博物館研究報告」第10号

*4 日野原健司2016『戦争と浮世絵』洋泉社



写真2 東叡山文珠楼焼討之図

2018年度第1回の交換特別講義を開催しました

在学生を対象とする交換特別講義については、すでに南山大学で博物館概論（黒沢浩教授）の一回分として「大学博物館の使命と機能」をテーマに実施しています（外山徹学芸員・5月25日）。学術資料の資料庫から発展、創立者・教員などの個人コレクションの収蔵、大学の教育理念に立脚したエクステンション型など大学博物館の来歴を紹介、当館を事例に大学博物館の使命と事業展開について解説しました。

明治大学・南山大学収蔵資料交換展示2018を開催します

会期：2018年9月29日（土）～11月4日（日）

入場無料 会期中無休

※その他詳細については、両博物館のホームページをご覧ください。

『明大考古学のいま、むかし—モノ学のその先へ—』

<会場：南山大学人類学博物館>

1950年の文学部考古学専攻（考古学研究室）および1952年の考古学陳列館の創立をもってはじまる明治大学の考古学は、戦後の重要遺跡の発掘にはじまり、数々の発掘調査を自ら推進しながら、約70年間におよぶ考古学の教育と研究の道のりを歩んできました。

南山大学人類学博物館で開催する本展覧会は、2018年5月に明治大学で開催した展覧会「明大考古学の過去・現在・未来—モノ学のその先へ—」のダイジェストです。展示では、「いま」の明大考古学の特色の一つである、「基準資料の再検討」を紹介します。明治大学博物館にコレクションされている学史的な「むかし」の重要遺跡をあらためて現在の研究視点から見直すことで、新しい課題を洗い出し、発掘当時には思いもよらない最新の研究手法を用いて、遺跡と遺物が語るコトを読み解く研究の一端をご覧ください。



『南山大学人類学博物館所蔵 愛知の考古資料—土器・陶器を中心に—』

<会場：明治大学博物館>

今年の南山大学人類学博物館からの出品は、当館が所蔵する考古資料の中から、土器・陶器を中心に展示します。愛知県は古代より焼き物の産地として知られてきました。いわゆる「瀬戸物」と呼ばれるほど陶器生産が盛んでしたが、その伝統は縄文時代にまでさかのぼります。今回展示するのは、そうした土器・陶器資料の中でも、全国的にもよく知られた遺跡、あるいは当地を代表する資料です。特に、弥生時代を代表する遺跡である西志賀遺跡は、明治大学でも発掘調査をし、博物館に所蔵・展示されていますので、今回の展示が、発掘以来、実に80年近くもの時を経ての再会ということになります。そういう意味で、展示資料を通して遠い過去に思いを巡らせるだけでなく、それらを発掘し、研究してきた先人たちの姿にも思いを馳せてみてください。

図書室から

今回は、学生図書室受付ボランティアの募集についてお知らせします。

図書館員を目指して勉強中の方、博物館図書室に興味のある方、学生ボランティアとして活動してみませんか？

博物館図書室は一般に公開されており、どなたでもご利用いただける施設です。図書の館外貸出は行っており、図書室内での閲覧と複写の利用となっています。おもに商品・刑事・考古の各分野と博物館学に関する図書や雑誌を収集しており、蔵書数は約12万冊に及びます。特に考古学関係の図書は全国の発掘調査報告書などが充実し、各地の大学の学生や研究者が訪れ、考古学界へ大きな貢献を果たしています。

業務内容 利用者の入退室受付、利用上の禁止事項のチェック（鞆類の持込み、図書の持ち出しなど）。業務中は読書も可能です。

募集対象 明治大学学生および大学院生、聴講生、研究生。学年・経験は問いません。なお、交通費は支給しません。

活動日 図書室開室日の第1・第3土曜日の9:50～16:30（9:50～13:00、13:00～16:30の半日単位でも可）。
※平日及び第2・第4土曜日は、博物館友の会ボランティアが担当します。

申込方法 必要事項（住所・氏名・学部専攻・学年・電話番号・メールアドレス）を明記し、メール、郵送、博物館受付持参のいずれかの方法でお申し込みください。

メールアドレス:mm.volunteer20181013@gmail.com（件名に「学生図書室受付ボランティア応募」と明記）

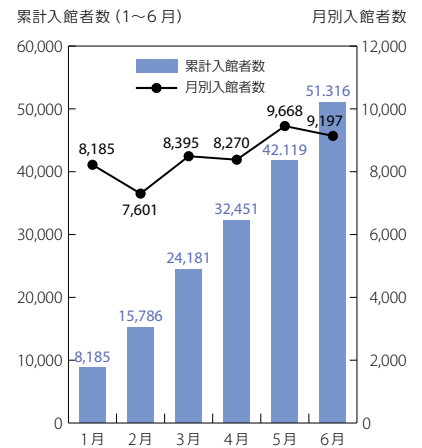
郵送：〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1 明治大学博物館事務室 学生図書室受付ボランティア係 宛

博物館入館者数の動き (2018年1月～6月:延べ人数)

2004年4月以降の
総入場者数累計 **985,501**人

1月～6月	延べ人数
図書室利用者数	1,481
教室等利用者数	975

特別展示室来場者内訳		開催日数	来場者数
1/10～1/30	中国「革命宣伝画」展	21日間	3,403人
2/3～3/4	力の誇示・馬形埴輪の世界／茨城県大日塚古墳の埴輪—最新の発掘調査成果から—	30日間	2,718人
3/10～4/8	アンコール展示 十手と錦絵—描かれた捕者の世界	30日間	2,856人
4/13～5/6	新収蔵・収蔵資料展 2018	24日間	2,244人
5/21～6/21	明大考古学の過去・現在・未来—モノ/学のその先へ—	32日間	4,022人



団体見学の記録 2018年1月～6月

※事前に見学のお申し込みをいただいた団体のみ掲載しております。

【一般】 いきがい大学 春日部史跡めぐりクラブ 22 (20名) / でんでんむしの会 (10名) / 取手健康の集い (30名) / 金曜会 (25名) / さいたま市シニアユニバーシティ大宮校 12期校友会 (35名) / 渋谷区自然と文化散歩会 (40名) / 中国湖南省 都内の大学めぐり (30名) / 海上自衛隊 中央システム通信隊 (75名) / テクテク倶楽部 (22名) / 杉並区歩つとのおたのしみ会 (13名) / 日本セカンドライフ協会 (16名) / 都内火曜日の会 (8名) / マスター学院 (27名) / Sun-A 国際学院 大江戸校 (17名) / 宇都宮ハイキングクラブ (20名) / ところざわ倶楽部 野老澤の歴史をたのしむ会 (20名) / 尚史会 (17名) / 小江戸会 (10名) / 八千代ふれあい大学 19期OB会 (15名) / やしお市民大学 OB健康ウォーキング部会 (24名) / ピーチ会 (8名) / イトーヨーカドーカルチャーグループ「山手線から歩き会」(12名) / 歩こう会 (10名) / 生涯現役ときわ会 歴史愛好会 (15名) / 千葉市さくらの会 (9名) / 四歩の会 (7名) / ねんりん大学OB会 (23名) / おいらく山岳会 (34名) / 朝霞稲門会 (6名) / 北大教養クラス会 (7名) / 犬吠会 (13名) / 船橋市民大学 ロッケン会 (7名) / 有明会 (5名) / カレッジ12 (13名) / 柏南交友会 (60名) / まつど史跡探勝会 (10名) / 所沢市歴史探訪会 (20名) / 世田谷区老人大学グループ 2P文A会 (10名) / 埼玉県立草加高等学校PTA (45名) / 東京保護観察所 (30名) / 横浜市老人会 (四つ葉会) (8名) / よみうりカルチャー (12名) / 千葉県生涯大学校福祉科OB会 (13名) / 公益社団法人上野法人会 (24名) / 生涯大学校あるこう会 (17名)

【中学校】 武蔵村山中学校 (10名) / 日野市立七生中学校 (特別支援学級) (12名) / 目黒区立大鳥中学校 (5名) / 京都市立西京高等学校附属中学校 (7名) / 東村山市立東村山第二中学校 (6名) / 東村山市立東村山第七中学校 (7名) / 清泉中学校 (6名) / 大田区立安方中学校 3年生 (12名) / 足立区立千寿青葉中学校 1年生 (20名) / 世田谷区立千歳中学校 (6名) / 荒川区立原中学校 (18名) / 江戸川区立小岩第一中学校 1年生 (18名) / さいたま市立大宮西中学校 (12名) / 吉川市立南中学校 (11名) / 葛飾区立中川中学校 1年生 (16名) / 石巻市立桃生中学校 3年生 (7名) / 北海道恵庭市立恵明中学校 3年生 (6名) / 音更町立音更中学校 3年生 (6名) / 石巻市立河南東中学校 (7名) / 横手市立平鹿中学校 (10名) / 仙台市立富沢中学校 (29名) / 松坂市立飯高中学校 (6名) / 福崎町立福崎東中学校 (12名) / 巨理町立巨理中学校 (10名) / 大崎市立古川東中学校 (10名) / 仙台市立田子中学校 (10名) / 横浜市立上永谷中学校 (7名) / 与謝野町立江陽中学校 (10名) / 福井市鷹巣中学校 3年生 (10名) / 小樽市立朝里中学校 (4名) / 四日市市立中部中学校 3年生 (10名) / 長久手市立南中学校 (5名) / 名古屋立猪子石中学校 (15名) / 上尾市立大石中学校 (36名) / 西尾市立西尾中学校 (4名) / 桑名市立光風中学校 (30名) / 岡崎市立甲山中学校 (40名) / 美浜町立野間中学校 3年生 (6名) / 柏市立手賀中学校 (22名) / 川崎市立川中島中学校 2年生 (21名) / 青丘学院つくば中学校 (5名) / 大田原市立若草中学校 (6名) / 川崎市立向丘中学校 2年生 (7名)

【高等学校】 青山学院高等部 3年生世界史aクラス (30名) / 佐賀県立佐賀西高等学校 (25名) / 小倉南高等学校 (16名) / 桐朋女子高等学校 (24名) / 福岡県立福岡講論館高等学校 (4名) / 藤村女子高等学校 (19名) / 法政大学高等学校 (23名) / 成城高等学校 (47名) / 湘南工科大学附属高等学校 (6名) / 埼玉県立吉川美南高等学校 2年次 (23名) / 八千代松陰高等学校 3年生 (56名) / 横浜清風高等学校 歴史研究同好会 (6名) / 神奈川県立旭高等学校 (20名) / 相洋高等学校社会部 (5名) / 神奈川県立川和高等学校 (20名) / 東京都立小平高等学校 (7名) / 三田国際学園高等学校 (15名) / 埼玉県立杉戸高等学校 (6名) / 樹徳中学校・高等学校一貫コース5年生 (36名) / 栃木県立鹿沼東高等学校 (10名) / 東洋高等学校 (6名) / 埼玉県立松山女子高等学校 (200名) / 明治大学付属明治高等学校 (7名) / 早稲田中学・高等学校歴史研究部 (18名) / 昌平高等学校 1年5組 (43名) / 水戸葵陵高等学校特進Iコース 2年生 (35名) / 東京学館新潟高等学校 2年生 (5名) / 香川県立高松桜井高等学校 (41名) / 岡山県立岡山山城東高等学校 (28名) / 東京都立美原高等学校 2年生 (20名) / KTCおおぞら高等学院 (10名) / 岡山県立津山東高等学校 (42名)

【大学・大学院・専門学校】 お茶の水女子大学 考古学通論II (10名) / 駿河台大学法学部 竹内ゼミ (18名) / 龍谷大学法学部 (16名) / 青山学院大学法学部安部ゼミナール (刑事法) (18名) / 大正大学考古学研究会 (20名) / ナンヤン理工大学 (15名) / 文化服装学院 (7名) / 明治大学情報コミュニケーション学部 横田ゼミ (9名) / エリート日本語学校 (19名) / 東京法律専門学校 (25名) / 共立日本語学院 (15名) / 慶應義塾大学大学院法務研究科 (18名)

M2カタログ 考古マスキングテープ販売中

モチーフは博物館所蔵の土偶・埴輪・石器・鏡・土器・銅鐸・・・など盛り沢山! 考古学の魅力がギュッと詰まった一品です。大人気の山形土偶(頭部が山のように三角形)モチーフのイラストもしっかりプリントされています。背景は鮮やかなブルーなので、どこに貼っても映えるデザインですね。売上NO.1の考古ボールペンとお揃いで購入するのもお勧めです。

M2ショップ (2018年上半期)
グッズ売上トップ3

[1位] ボールペン(考古) [2位] ふせん(内藤家 翁)
[3位] Tシャツ(古墳 ブルー)



考古マスキングテープ: 1個 250円

ミュージアムショップ開室日 月～土 10:00～16:30
日曜・祝日・大学が定める休日、夏休期間(8/1～9/19)中の土曜は休室

博物館友の会へ参加のお誘い

明治大学博物館友の会は、「博物館開設の趣旨に賛同し、会員による自主運営により、会員相互の知識と親睦を深め、博物館活動に寄与すること」を目的として、1988年に創設され、今年30周年を迎えました。

会員の方は、いろいろな活動を通していろいろな方との出会いと自己研鑽に励んでおります。現在行っている、友の会の主な活動を紹介しますので、ぜひこの機会に友の会活動へご参加ください。

ボランティア活動

- ・展示解説ボランティア：博物館常設展示室で来館者へ解説の活動をしています。
- ・博物館図書室受付ボランティア：図書室利用者の入退室の受付をしています。
- ・博物館図書室書棚整理・配架ボランティア：書棚の整理と新蔵書の配架をしています。

講演会、見学会活動

- ・講演会の実施：年間8～9回の講演会を実施しています。（会員は参加費無料です）
- ・見学会の実施：年間6～7回の見学会を実施しています。

分科会活動

- ・考古7、古文書3、工芸1計11の学習分科会を会員が自主開催して、生涯学習に取り組んでいます。

友の会への申込方法

詳しくは明治大学博物館に備えています「入会のご案内」をご参照、または明治大学博物館友の会連絡先へ「入会のご案内」をご請求ください。

明治大学博物館友の会 連絡先

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1 明治大学博物館気付 博物館友の会
メールアドレス：meihakutomonokai@yahoo.co.jp

※博物館に友の会の担当者は常駐しておりません。連絡は必ず「ハガキ」または「Eメール」をお願いします。

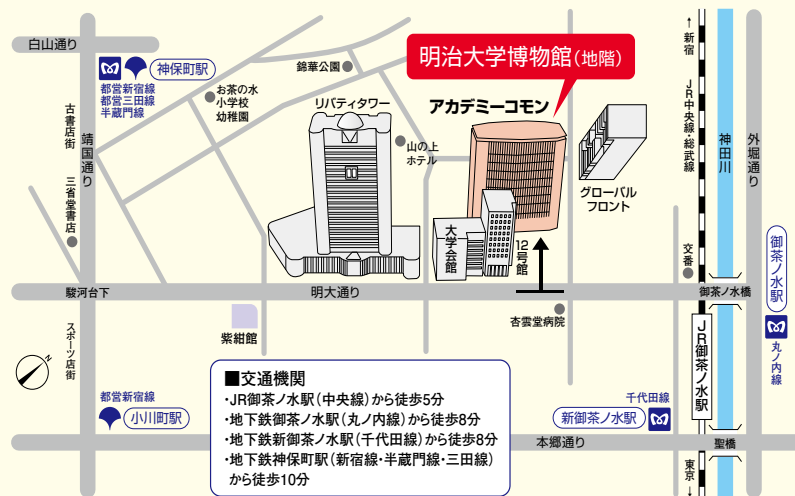
博物館案内

展示室ご利用案内

- ◆開室時間
10:00～17:00(入館16:30まで)
- ◆休館日
夏季休業日(8/10～8/16)
冬季休業日(12/26～1/7)
8月の土・日に臨時休館があります。
- ◆観覧料
常設展無料。
特別展は有料の場合があります。

図書室ご利用案内

- ◆開室時間
月～土 10:00～16:30
- ◆閉室日
日曜・祝日・大学が定める休日
夏休期間(8/1～9/19)中の土曜日
※図書室はどなたでもご利用いただけます。
※蔵書は閲覧・コピーのみとなりますのでご了承ください。



編集後記

本年8月22日、当館は来館者累計100万人を突破いたしました。これもひとえに皆様のご愛顧の賜物であり、改めて厚く御礼申し上げます。同時に、当館が今後も皆様の知の探究のための拠点であり続けられるよう、発信を続けたいと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。